

## WHO インターン体験記

予防歯科学分野 和 泉 亜 紀

2004年9月から2005年3月いっぱいまでの半年間、スイスのジュネーブにインターンとして留学してきました。

永世中立国として知られるスイスの国土は意外にせまく、その面積は4万1,290平方キロ。九州よりすこし大きいくらいです。国土のほぼ60%が欧州の屋根アルプス山脈、10%がジュラ山脈に占められており、資源が少なく、そのため歴史的に工業・金融業に特化して発展を遂げてきました。時計やICなどの輸出品目が特産品であることを思えばかなり日本も見習うべき点が多い国です。

わたしが半年を過ごしたジュネーブは永世中立国スイス連邦の一都市であり、国連本部のある都市としてあまりにも有名です。ヨーロッパのほぼ中央に位置する地理的要因により、スイスは公用語としてフランス語、イタリア語、スイスドイツ語、ロマネシュ語の四言語を採用しています。このうちジュネーブはフランス語圏に属します。

風光明媚な土地柄、観光国家でもあるスイス全土は英語を公用語としない国としてはかなり英語が通じるほうですが、それでも地元の人々の多くはフランス語でしか会話が成立しないことも多々あります。英語でコミュニケーションを取る都合

上、仕事面でも苦労しましたが、フランス語がほとんどわからなかったため生活面ではそれ以上に苦労しました。

国際都市ジュネーブでは道を歩いているとフランス語、英語、イタリア語、果てはアラビア語など、ほとんど記号としか思えない看板が並んでいて、初めのころはつくづく遠い所に来たと思ったものでした。たまに日本語を見ると自分が理解できる言葉もあることにほっとしたものです。

レマン湖にはジュネーブのシンボル・大噴水(ジュドー)があります。19世紀に造られたこの噴水は一分間に3万リットルの水を140メートル吹き上げることができます。遠くから石造りのホテルを背景にして吹きあがる水しぶきはとても幻想的で美しく、とりわけ夏の黄昏時のそれは格別です。ジュネーブを訪れた際にはぜひ一度はレマン湖のほとりを歩かれることをお勧めします。天気がいい日は湖のほとりで真冬でも(!)水着姿の人々が日光浴している光景が見られるでしょう。

ここからは何をしてきたのか、その説明に入りたいと思います。

まずインターンシップの説明に入りましょう。日本ではあまり耳慣れない響きですが、これは「学



写真1 WHO 本部外観



写真2 レマン湖

生が一定期間企業等の中で研修生として働き、自分の将来に関連のある就業体験を行える制度」です。日本ではまだあまり聞いたことがない制度ですが、欧米ではかなり普及しているようです。

WHO ではインターンたちは3～6ヶ月の契約でWHOの仕事に関わります。部署によっては多忙に飛び回る常勤の代わりに正式な仕事を割り振られたりもします。

インターンは通例単身でやってくるため、友人知人はあまりいません。そのため内部ネットで定期的にランチの開催が告知されます。通称インターンランチと呼ばれるそれはカフェテリア前の大時計で待ち合わせて、ランチを食べて友人知人を作る会です。英語が得意でない日本人にはなかなか難しい、勇気のいることでしたが、幸い幾人かの知人を得ることができました。彼らと知り合えたことはとても幸運だと思います。

WHO (World Health Organization ; 世界保健機構) の歯科部門 (Oral Health Programme) は常勤のピーターセン先生と秘書がそれぞれ常駐しているだけのきわめて小さな部署ですが他の慢性疾患部門と協調を取ることで、その活動そのものは決して他の部署にも劣ることはありません。

WHO の歯科インターンの仕事は、全世界の歯科データベースをつくること。WHO グローバルインフォベース (Global infobase) の歯科の分野の構築です。これは歯科のみのデータベースではなく、糖尿病、血圧、コレステロール、タバコなど慢性疾患と関連する因子を含めたデータベースとなっています。歯科部門については各国のCPIやDMFT、口腔癌の罹患状況などを主に論文から取りまとめ、誰でもWHOのデータベースにアクセスすれば全世界のどこからでも閲覧できる状況を目指しています。その一部はすでに公開されていますので、興味のある方は以下のURLをご参照ください。

(<http://www.who.int/infobase/report.aspx>)

他には口腔癌や高齢者疾患、歯科疾患の罹患状況を調査するためにアンケートや小冊子を各国に送ったり、FDI (World Dental Federation ; 国際歯科連盟) などの機関に進行中のプロジェクトをアピールしたりしています。とりわけ発展途上国には生活習慣としての噛みタバコと口腔癌の因果関連を知らない人々がまだかなり多く、知識の啓蒙に力を入れていました。

これらの業績が認められた結果、新潟大学予防歯科学分野はWHOのコラボレーティングセンターとして認められることになりました。自分がかかわったプロジェクトがその一助となったことを大変光栄に感じます。

日本では考えられないようなトラブルの経験を含めて、とても有意義な体験をしたと思います。もしもこれから海外に行く機会や留学を打診された方は、一度は行くことをお勧めします。きっとあなたの人生経験に彩りを添えてくれるでしょう。

最後にたぐいまれな機会を与えてくださった宮崎先生ならびにピーターセン先生、向こうでお世話になったたくさんの方々へ感謝をささげて、このレポートを終えたいと思います。本当にどうもありがとうございました。



写真3 インターンたちと